

目 次 福祉図書文献研究 第15号 2016.11

■巻頭言

「今こそ試される福祉図書文献学会の力」 曾 我 千 春 1

■基調講演

当事者研究の現代的意義と可能性  
 -実践研究と文献研究- 向谷地 生 良・早 坂 潔・山 根 耕 平 3

■原著論文

徳島県の社会事業施設・団体形成史に関する文献研究  
 -特に『社会課関係事務要覧』を基盤として- 井 村 圭 壯 19

我が国の精神科作業療法の導入における呉秀三の役割  
 -日本の精神科作業療法における歴史的-考察- 幸 信 歩 35

日本における父子家庭研究の動向と支援施策の課題  
 -言説にみる問題の所在- 浅 沼 裕 治 45

離島の介護職員における健康関連QOLとストレス反応の関連性 田 中 康 雄 55

医療的ケアを学ぶ機会があった介護福祉士養成課程の学生の特徴  
 平 澤 泰 子・小木曾 加奈子 65

■実践報告

児童虐待防止法について 倉 橋 弘 73

特別支援教育現場における知的障害児に対する指導方法に関する一考察  
 -教員とスクールソーシャルワーカーとの連携事例から-  
 安 田 誠 人・吉 弘 淳 一・谷 川 和 昭  
 梅 木 真寿郎・丸 山 あけみ・井 村 圭 壯 77

日本の社会事業施設団体形成史研究の課題 井 村 圭 壯 81

地方都市「消滅」を乗り越える！  
 -G県Y市からの提言- 宮 嶋 淳・小木曾 加奈子・田 村 禎 章  
 今 井 七 重 85

高齢者ケアの質を高めるICFを活かしたケアプロセス  
 小木曾 加奈子・安 藤 邑 恵・今 井 七 重  
 緒 形 明 美・佐 藤 八千子・高 野 晃 伸  
 田 村 禎 章・樋 田 小百合・中 谷 こずえ  
 祢 宜 佐統美・彦 坂 亮・平 澤 泰 子  
 山 下 科 子・渡 邊 美 幸 91

生きる自分心鏡 杉 山 雅 宏 97

実践報告

# 地方都市「消滅」を乗り越える！

—G県Y市からの提言—

Study on how to Local City to avoid Extinction  
- Recommendations made from Y city, G prefecture -

宮嶋 淳 中部学院大学  
小木曾 加奈子 岐阜大学  
田村 禎章 ユマニテク医療福祉大学校  
今井 七重 中部学院大学

## I. 研究者

監 修：丹羽英之  
編集代表：宮嶋 淳  
編 集：大井智香子、大藪元康、  
小木曾加奈子、田村禎章  
執筆者：今井七重、大井智香子、大藪元康、  
小木曾加奈子、佐藤八千子、  
柴田由美子、棚橋千弥子、田村禎章、  
祢宣佐統美、宮嶋 淳

## II. 著書名

『地方都市「消滅」を乗り越える！  
岐阜県山県市からの提言』  
中央法規、254頁、B5版、2016年2月  
(第1版第1刷)

## III. 研究経緯

### 1. 研究の背景

地元(地縁・血縁・好縁の3次元的システムで捉えるコミュニティ)は、隣人との関係の中で、一人ひとりが自分らしい生き方を実現していく場であり、歳をとっても、障害があっても、子育て中であっても、仕事に追われていても、コミュニティで自分らしい生き方(幸せの追及)を全うできることが、その人の尊厳(自己実現と幸福)を支えることになる。その意味で、今後の我が国における福祉(幸福)のあり方をシステムチックに創造していく際、公的な福祉サービスや住民の福祉力の充実・整備を図ることが求められている。コミュニティにおける身近な生活課題に対応する、新しいコミュニティでの支え合いを進めるための地域福祉の創造のあり方を



検討することが緊要な課題であろう。そこで、新しい地域福祉の意義や役割、それを推進するために求められる条件とは何か、についての考え方を岐阜県山県市のフィールドワークにより整理し、住民と行政の協働と協創による福祉のあり方を研究した。

## 2. 研究の視点と方法

本研究は、地方都市、あるいは農山村地域のソーシャルキャピタルの創造に資する実践を調査し、地方都市「消滅」への対応として普遍化可能な実践を探索することをめざした。

そのため、地方都市「消滅」への対応の視点として、縦糸としての「コミュニティの主體的な協働と協創」と横糸としての「対象コミュニティ別の暮らしのサポート実践」に着目した。

具体的な研究方法として、社会福祉学の知見のみならず、歴史学・社会政策学・社会心理学・幸福学・医療の知見を活用し、フィールドワークと学際的なディスカッションにより、独自の試論を構築した。

## 3. 倫理的配慮

本研究は、中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究倫理委員会の審査を経て行った。

# IV. 研究内容

## 1. 出版内容

本書の編集にあたった者は、岐阜の地域福祉2009(平成21)年に日本地域福祉学会(岐阜大会)が開催され、その実行にあたった者などで組織した「岐阜の地域福祉実践・研究ネットワーク(=Gifu community-work practice and research network; 通称: GCP-Nets)」の主要なメンバーである。GCP-Netsは、2001年9月に行なわれた日本福祉教育・ボランティア学習学会の岐阜大会後に設立された、岐阜の福祉教育とボランティア

を考える会と歩みを同じくし、設立そのものが地域福祉に関わる実践者と研究者の協働によるものである。GCP-Netsの設立趣意書にも掲げているとおり、本書にかかる研究は、「岐阜の歴史的・文化的土壌の上で、地域福祉実践と研究のあり方を改めて検証しつつ、地域福祉の新時代に見合ったネットワークの地平を、県民の皆様とともに切り拓いていく」というスタンスで進められた。すなわち、本書は実践研究の書である。

こうした意味において、本書は岐阜県の山県市に焦点をあてている。それは、「一見どこにでもある地域」に焦点をあてることにより、「どこにでもあるからこそ、一般化できるし、そこに強みがある」という発想の転換からスタートしているところにユニークさがある。そのユニークさは、以下の目次や概要、導かれた結論から確認できるだろう。

## 2. 目次

- 第1章 求められる協働・教育・協創のメカニズム
  - 第1節 政策分析の視点
  - 第2節 地域福祉の理論と研究の視点
  - 第3節 どこにでもある「強み」を活かす
- 第2章 地域を歴史の視点から捉える
  - 第1節 「地域」の範囲
  - 第2節 地域福祉における歴史の視点の必要性
  - 第3節 平成の大合併を振り返る
  - 第4節 地域福祉計画における歴史の視点
  - 第5節 地域福祉推進における「地域の歴史」の視点の必要性
- 第3章 一緒に成長できる街
  - 第1節 山県市の子ども・子育て実践
  - 第2節 子どもと一緒に、親が輝くとき
  - 第3節 輝くママへのインタビュー
  - 第4節 地域の価値を高める「一緒にリズム」
- 第4章 主体の形成・参画・レビューの「文化」

性

- 第1節 市民福祉教育論 ～主体形成とは何か～
- 第2節 ボランティア・市民活動の施策展開
- 第3節 住民参画が「文化化」した事例
- 第4節 大人の地域デビュー「地域おこし協力隊」
- 第5章 ともに生きるためのつながりをつくる
  - 第1節 年を重ねるといふこと
  - 第2節 プロダクティブ・エイジング
  - 第3節 世代間交流
  - 第4節 一歩前にすすむ
- 第6章 ここで「安心」、「やすらぎ」の風土化
  - 第1節 住民発のデバイス
  - 第2節 納得できる「最期」
  - 第3節 「つながる場」の喪失
  - 第4節 やっぱり「ここ」が好き
- 第7章 シンポジウム：「地方消滅」時代の新しい地域福祉のあり方
  - 求められる協働・教育・協創のメカニズム—
- 第8章 地方発、新たな理論—CLSアプローチ—
  - 第1節 本書の要約
  - 第2節 新たな理論～CLSアプローチ～の提示
  - 第3節 提言～おわりに

### 3. 各章の概略

本書は以下の8章から構成している。

第1章では、現在のわが国で進められている地域づくりの政策をレビューし、一地方都市がどのような影響を受けているのかを概観した。政策動向を福祉の視点、とくに地域福祉の理論からどのように理解し、アプローチしていくのか、筆者の認識を示した。

第2章では、現在の山県市が形成されるまでの歴史を振り返り、地域が行政区として自治を形作っていく様を眺望した。そのなかで、災害

に直面した場合の自治体の「主体」としての特質を検討している。その到達点としての「主体—計画—歴史化」に注目している。

第3章では、「元気なママたち」が元気で居続けられる活動を自分たちの力で起こし、広げ、定着させていった経緯をレポートした。そうした動きは「ママの幸せこそ、子どもの幸せ」や「ママこそがソーシャルキャピタル」という理念を具現化したものであると分析できることを示した。そして理念が具現化していくためのポイントとは何かをソーシャルワーク実践理論から考察している。

第4章では、「福祉教育」を「幸せづくり教育」と捉えている。従前、「福祉教育」というと子ども中心に捉えられていた。その枠組みを越えて「大人の地域デビュー」を「大人の『幸せづくり教育へのデビュー』」と捉えて、事例研究を行なっている。

第5章では、「年をとること」を当事者目線で真正面から捉え、「輝く高齢者＝笑顔が素敵な高齢者」のための生き様を検討している。

第6章では、「『今、ここにある』懐かしいもの」を風化させずに、生かす方法と視点を提示した。われわれにとって「冠婚葬祭」の意味は何だったのか、あるいは「われわれにとっての魂のやすらぎ」とは、どのようなことなのだろうかを検討している。

第7章では、地域における実践の理論化を展望する。前章までの議論を踏まえ、まち・ひと・くらしのソーシャルな関係と開発の焦点を見据えた座談会を実施した。座談会においては、ソーシャル・キャピタルとソーシャル・ディベロプメントの視点から、地域創生の現在を担う地元と大学双方の関係者による協働・教育・協創の展望を中心に語って頂いた。

そして第8章では、本書を構成する全体(調査・研修・語り)を通して得た知見や示唆をエビデンスとして、筆者による学術的ディスカッ

ションを行い構築した、地方の「生き残り」のための実践理論を提示している。これは筆者が提示する地方都市「消滅」を乗り越えるためのグランド・デザインである。筆者が提示する地域生命学的アプローチ (Community Life Science Approach : CLSアプローチ) は、看護学や生殖医療、生命科学の視点を持つ、福祉研究者ならではのユニークなものとなっていると考えられる。

現在進行形で、わが国全体で、中央と地方のあり方、福祉と生活、あるいは福祉と文化の構造的な理解の深化が求められている。「国際社会の中での日本の位置」について考察していくことも重要な視点であると認識しているが、本書の主たる目的とは異なると考え、別論で検討することとした。

## V. 研究の結果と考察

### 1. 研究の結果

どのような地域にも「エンパワメント(地力)とヘルスプロモーション(自力)とコミュニケーション(対話)」が重要な役割と機能を果たし、それらを測定する「ものさし(指標)」が必要である。そして当該地域の「歴史と文化」は生き残りに関するモチベーションに働きかけ、「今ここ」の「共生」に関わる姿に、「楽しい・活気・共生・役割」などの観点からの相互作用が及ぼされるとき、コミュニティは生命体として輝きだす。すなわち、生命体の一員である一人ひとりが「コミュニティを生命体」と認識することにより、「生き残り(=消滅を免れる)」が認識され、構造化されると考えられる。

### 2. 考察

一連の調査研究から筆者が導いた新理論は、図1のとおりである。その特徴は、第1にソーシャルワークというエコロジカル・アプローチにヒントを得て、その視点を「人」から「コミュニ

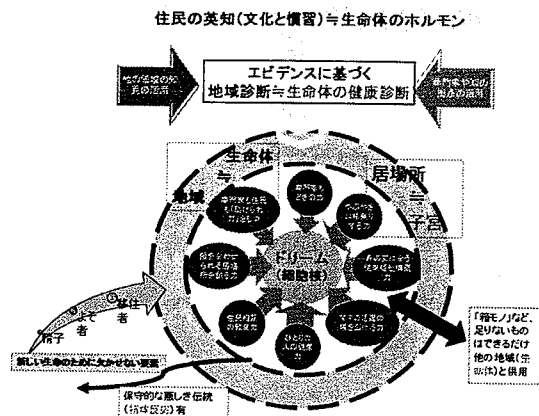


図1 地域生命学的アプローチの構造

ティ」理解へと拡大した。第2に社会福祉・ソーシャルワーク研究者の視点に加え、医療・看護・生命科学の研究者の視点を取り入れた理論である。第3に「無機物」ではなく「有機物(生命)」、とくに女性性特有の創生のメカニズムを用いて解釈を加える、学際的な解釈科学として構築したことである。図1は、地域生命学的(CLS)アプローチの基本的構造をイメージしたものである。図1は、地方都市が「消滅」を乗り越えるために必要とする諸要素・諸条件を、生命科学の知見により解釈し、次のような視点・動き・仕組みが存在するか否かに焦点をあて、当該地方都市にアプローチしようとするものである。すなわち、CLSアプローチは、地域を生命体としてとらえ、新しい生命を生み出す子宮を地域の中心としてイメージし、あらゆる人々の居場所としてとらえている。その居場所には、従前の人々も外部の人々も同居しており、そこが真に快適な居心地の良い場所であるか否かをチェックしていくことが求められる。つまり、子宮等生命を生み出す器官の健診を怠らないことの重要性をイメージしている。チェック項目は円の中心に向かって機能する「専門家もどきの力」「つぶやきに相乗りする力」「身の丈に合う健康福祉構築力」等8機能を例示している。生命科学は日々進歩を続けており、その進歩をケーススタディやエビデンスとして、地域が、そして福

社関係者が取り込むことにより、新たな地域をとらえる視点が確保できるものとする。

### 3. 結論

当該地方都市が「消滅」を乗り越えるための焦点は、少なくとも次のようなメカニズムを必要とする。

- ① これからのコミュニティは「田舎＝共同体、都会＝集合体」というドミナントな感覚を脱皮し、オルタナティブな着想を必要としている。
- ② 「プロブレム(問題)」ではなく「ドリーム(夢)」からコミュニティの構築をすすめる。
- ③ 人々の「つぶやき」に相乗りすることが「面白い」という感覚を持てるキーマンがいるとき、予期せぬ「創発」が起き、「ドリーム」へ近づけるかもしれない。
- ④ 緩やかな絆を持った新しい地域社会とは、公共体であり、「生き物である」という捉え方をしていく必要がある。
- ⑤ 「生き物である」共同体を生き活きとさせるためには、ルールは限定的に決め、絆を強めたり弱めたり、生態学的志向が求められる。
- ⑥ 市民に関係するハイリスクな物は、周辺のシティと共同で対応を考える。
- ⑦ 「身の丈に合う」保健医療福祉の構築を皆で進め、皆が役割を持てると、人は輝ける。
- ⑧ 誰でも「助けて」と他人に言えることとそれを尊重できる力が、まちの風土を育てる。
- ⑨ まちを創るためには、専門家も必要で、専門家によく似た人も必要である。
- ⑩ 人々の発案によって誰にとっても「居心地の良い場所」をたくさん作ることで、「互

恵性」の意識が育つ。

### 4. 今後の課題

本研究は、岐阜県山県市における「子育てから墓場まで」に関わる人々の営みをフィールドリサーチし、事例研究を通して新しい理論を構築した帰納的研究であり、一般化することはできていない。また、筆者が提示するCLSアプローチも、ソーシャルワーク理論というエコロジカル・アプローチの延長線上にあるとしながらも、理論の構築・発生の機序まで含めて検証できているものではない。少なくとも今後の課題として、理論の一般化並びに理論継承の検証にかかる課題がある。

#### 参考文献

- 小田兼三「社会福祉学研究方法論序説」『福祉図書文献研究』第11号、2012、pp 3-9
- 荒川区自治総合研究所編「あたたかい地域社会を築くための指標－荒川区民総幸福度－」八千代出版、2010
- 福永正明監修「世界一しあわせな国 ブータン人の幸福論」徳間書店、2012
- 岐阜県「第三期岐阜県地域福祉支援計画」、2014
- 岐阜県「岐阜県長期構想(平成21～30年度)」、2009
- 経済企画庁「平成12年度国民生活白書」、2000
- これからの地域福祉のあり方に関する研究会「報告書 地域における「新たな支え合い」を求めて－住民と行政の協働による新しい福祉－」、2008
- OECD開発センター編著／門田清訳「OECD世界開発白書2 富のシフト世界と社会的結束」明石書店、2013
- 総務省「平成23年社会生活基本調査」、2013
- 山県市「第2次山県市地域福祉推進計画 支え合い、助け合う地域福祉のまちづくり(平成25年度～平成29年度)」、2013
- 財団法人経済広報センター「ボランティア活動に関する意識・実態調査報告書」、2011